

## 疾患を持つ子供に対する父親の役割に関する研究

西 林 洋 平, 大 村 勉

要約：子供が病気で入院した場合の父親の役割を知るてがかりとして、父親の面会率を調査した。平均面会率は73.7%と良好で、疾患、病期などによる差は少なかった。祖父母と同居している父親の面会率は同居していない者より低値であった。これらは、父親の育児への積極的参加を意味すると考えられるが、気軽に休暇をとれる、などの環境づくりが必要と考えられた。

見出し語：疾病 入院 父親 付き添い

### 〈研究方法〉

#### 1)対象

1990年3月より1991年8月までに、松山赤十字病院小児病棟に3日以上入院した小児1440例のうちアンケートを回収できた676例（回収率47%）である。なお、当院小児科、小児外科の診療圏は、松山市以外では、車で1時間半以内の地域と考えられる。

#### 2)方法

小児病棟に入院した症例については、付き添い者にアンケート用紙を配布し、父親の面会日を記録してもらい、退院時に回収した。また、父親の職業、祖父母と同居の有無についても調査した。調査期間中のある時期、父親の行動パターンを知ることを目的としたアンケートも実施した。

### 〈結果及び考察〉

#### 1)患児への付き添い

大多数は母親が付き添いをし、祖母の付き添いは2.3%、父親と交替が1.2%、父親の付き添いは1例のみであった。

#### 2)面会率

母親あるいは祖母が付き添いをしている症例を対象とした。各児の父親の面会率は、面会日数を入院日数で除して求め、百分率で示した。平均面会率は73.7%と良好であった。疾患別の面会率を表1に示した。

血液、悪性疾患の面会率は、他疾患に比して有意に低値であった。これは、血液、悪性疾患は、寛解に入ったか寛解中の症例が殆どであることが原因と考えられた。

#### 3)病期における面会の頻度

各疾患群とも、病期による父親の面会頻度については、一定の傾向はみられなかった。ただ、

表1. 疾患別面会率

感染症(164例)	72.2%
(呼吸器88例, 消化器25例, 尿路8例, その他43例)	
外科疾患(179例)	79.0
(ヘルニア94例, 急性腹症38例, その他47例)	
アレルギー疾患(52例)	83.5
(気管支喘息25例, MCLS19例, 紫斑病5例, その他3例)	
神経疾患(29例)	71.1
(髄膜炎14例, けいれん11例, その他4例)	
血液、悪性疾患(30例)	60.6
(白血病14例, 固型腫瘍7例, その他9例)	
心疾患(28例)	69.6
(開心術7例, 心カテ19例, その他2例)	
その他(104例)	80.2
(不明熱, 糖尿病, 自家中毒など)	

白血病に限定すると、寛解導入期の面会は良好であった。なお、死亡例ではアンケートは回収できず、実態は不明である。

#### 4) 入院日数による面会率の変化(表2)

入院日数による面会率を、症例数の多い感染症及び外科疾患で検討した。入院3~7日、8日以上との2群に分けると、感染症では、両者の面会率に有意差は認められなかったが、外科疾患では、8日以上入院の症例の方が面会率は有意に低値であった。

表2. 入院日数別の面会率

入院日数	感染症	外科疾患
3~7日	79.0%	79.0%
8日以上	72.8	63.7

#### 5) 長期入院例

2年以上入院は3例である。各症例の概略及び父親の面会頻度を示す。

症例1) 8歳、女兒、第2子。脳変性疾患にて気管切開。母親付き添い。月7~8回面会。この症例は、調査期間中に死亡した。

症例2) 17歳、男児、第1子。脳変性疾患にて人工換気療法中。付き添いなし。月8~10回面会。

症例3) 3歳、女兒、第1子。新生児仮死後人工換気療法中。付き添いなし。毎週日曜日面会。

3例とも患児は父親を認識できないが、面会は予想以上の頻度であった。

#### 6) 面会率に影響を与える因子

父親の面会率に影響を与える因子を検討するために、患児の年齢、兄弟中の順位、兄弟の数、両親の年齢、保険の種類、現住所(市内、市外の別)、祖父母との同居の有無を説明変数として、疾患別に重回帰分析を行った。なお、母親が付き添いをしている症例を対象とした。

感染症では、兄弟中の順位、兄弟の数、祖父母と同居の有無、外科疾患では、祖父母と同居の有無、保険の種類が説明変数として選択された(表3)。

他の疾患では、症例数が少ないため有意の関係は認められなかった。

#### 表3. 重回帰分析

Y(面会率),  $X_1$ (患児の年齢),  $X_2$ (兄弟中の順位),  $X_3$ (兄弟の数),  $X_4$ (父の年齢),  $X_5$ (母の年齢),  $X_6$ (祖父母との同居の有無),  $X_7$ (現住所),  $X_8$ (保険の種類)

感染症:

$$Y = 82.66 - 19.84X_2 + 15.72X_3 - 10.59X_8 \quad p < 0.05$$

外科疾患:

$$Y = 74.43 - 10.29X_6 - 9.73X_8 \quad p < 0.05$$

感染症、外科疾患について個々に検討すると、感染症では、兄弟中の順位による面会率は、第1子(81%)、第2子(76.4%)、第3子(64.1%)の順で第3子が他に比し有意に低値であった。兄弟の数でみると、2人(78.1%)、1人(85.4%)、3人(62%)の順で子供3人の家庭の面会率が低値であった。祖父母と同居の有無については、同居している父親の面会率(65.2%)が同居していない者(81.7%)より有意に低値であった。

外科疾患でも同様で、祖父母と同居している父親の面会率62.9%に対し、同居していない父親の面会率79.5%であった。(p<0.05)

表4. 祖父母と同居の有無による面会率

	感染症	外科疾患
同居有り	(25例)65.2%	(44例)62.9%
同居無し	(70例)81.7%	(125例)79.5%

同居の有無により面会率に差がでる理由について検討するために、無作為に抽出した200例を対象(回収率80%)に、子供が入院中の父親の行動について調査した。

まず、入院の動機については、開業医の紹介が半数であるが、母親の意志によるものが父親

のそれを上回った。一旦入院すると、父親は頻回に面会しており、その目的は子供に会い、病状を把握することであった。子供が入院中、3割の症例が休暇をとり、短時間付き添いを交替するなどして母親の負担を軽減させていた。中には、退職したり、比較的暇な職場に配置替えしてもらった例もみられた。他の子供の世話は、父親本人がするか、祖父母あるいは親戚にまかせる方法がとられていた。

これらの調査結果は、父親が積極的に育児に参加していることを示すと考えられるが、祖父母の同居している家庭では、父親の役割を一部祖父母が分担しており、そのために面会率が低下しているのではないかと考えられた。

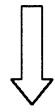
#### 〈まとめ〉

入院中の子供への父親の面会率は、73.7%と良好であった。この結果は、父親の育児への積極的な参加を意味すると考えられるが、仕事との両立など問題は多いと考えられる。そのためにも、父親が気軽に休暇を取れる、患児が入院中、他の子供を一時的に預かる方法を考えるなどの環境づくりが必要と考えられた。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:子供が病気で入院した場合の父親の役割を知るてがかりとして、父親の面会率を調査した。平均面会率は 73.7%と良好で、疾患、病期などによる差は少なかった。祖父母と同居している父親の面会率は同居していない者より低値であった。これらは、父親の育児への積極的参加を意味すると考えられるが、気軽に休暇をとれる、などの環境づくりが必要と考えられた。